

地域に根ざし、地域を愛し、地域の宝を見つける 「キッズ歴史探検隊」

～未来からのまなざしで歴史にかかわり、未来を育むために歴史にかかわり、未来のために歴史から学ぶ～

「ミュージアム未来学」の実践



- ①本いっぱい
- ②音楽いっぱい
- ③花いっぱい
- ④光いっぱい（イルミネーション・お日様）
- ⑤おひな様いっぱい（特別展）
- ⑥夢いっぱい（やってみたい企画公募）
（おいしさいっぱい・自然いっぱい・友だちいっぱい）

1. はじめに

私たちは、今あるものが存在する限りは、その重要性に気づかないが、一旦それがなくなるとなった時、改めてその存在の意味を問い、その重要性に気づく。今、志摩歴史資料館が、その時を迎えている。9月24日に「志摩歴史資料館」の活用を考えるシンポジウムが志摩ふれあい交流室において開催された。私はこのシンポジウムに参加して、初めて、志摩という地域の歴史的な重要性を知ることになった。弥生時代には斯馬国、古代には志摩県（あがた）を経て筑前志麻郡が成立しているという。海浜の砂鉄から古代製鉄が作られ、鉄釜で製塩が行なわれており、鉄や塩の生産基地であったということだ。このシンポジウムに出席するまでは、歴史についても、資料館についてもあまり考えたことはなかった。しかし、シンポジウムに参加して、志摩の歴史について研究者のお話を聞き、自分のことを振り返ることとなった。

まず、一つ目は、私自身の反省である。わが子とともに自分の住んでいる地域について学ぶこと、語ることがなかったという反省である。地域の歴史をないがしろにするということは、未来に夢を持つことができないことにつながる。私が幼少の頃、今のように生活は便利ではなかったし、豊かでもなかった。両親は自分たちの体験を語りながら、子ども達には自分たちのような暮らしではない、より豊かな暮らしをしてほしいと願いや夢をたくした。その眼差しに見守られ、大人になり、親になった自分はどうかという、子ども達に自らの暮らしについて語ってこなかった。歴史資料館を共に尋ねて、地域の歴史について語ることもなかった。地域の行事や伝統行事についてもあまり積極的に参加してこなかった。シンポジウムをきっかけに、フィールドワーク<1>を含め3回の可也公民館の歴史講座を受講した。そこで、学芸員の河村氏から、地域の歴史を学んだ。仏像や、地名、木簡やそこに書かれていることから、想像できること、その当時の人々の暮らしに思いをはせる。すると、今まで見ていた景色が変わったように感じた。

二つ目は、地域にある歴史資料館を身近に感じるものがなかったことである。可也公民館や健康福祉センターふれあいはよく訪れるのに、同じ敷地にある歴史資料館は訪れるという発想がなかった。それは、個人的な問題でもあるが、「行ってみよう。」「～してみよう。」という気持ちを起こさせるものが少なかったとも言える。

この二つの課題、つまり地域の歴史を大切にしていなかったこと、身近なものと感じてこなかったことへの打開策を夢アイデアという形で述べていきたい。

2. 新しい言葉で、新たなコンセプトを

今、目の前にある課題への打開策を持論で語ることは、現在の自分の能力ではできな
いと見え、以下に述べる二つの言葉、コンセプトを借りて論じていきたい。

志摩歴史資料館は、英語の表記で SHIMA Historical Museum と書かれている。ミュージアムなのである。このミュージアムという言葉に着目して、「ミュージアム未来学」と「アミュージアム」という二つのコンセプトを用いて、志摩歴史資料館ならびにその周辺を利用した夢アイデアを構想してみる。

◇ミュージアム未来学

一つ目のコンセプトは「ミュージアム未来学」である。塚原正彦氏は著書「みんなの

ミュージアム」の中で「ミュージアム未来学」という新しい社会のあり方を提起している。原文を引用すると以下の通りである。

… 時空の壁を超えて、人、モノ、コトを出あわせ、新しい知を創造する活動をとおして新しい未来を創造し続ける社会モデルを提起したい。

私が提起する社会モデルにおいて中核的な役割を果たす存在がミュージアムである。私のモデルでは、ミュージアムは、人、モノ情報を収集し、それらを縁結びしながら、新しい知を創造し続け、人々の限りない成長を促すことになる。

このようなミュージアムを活用し、あらゆる地域社会や組織に「知と学び」をふり注ぐことで、人々を成長させるための働きかけをとおして社会を変え、新しい社会をデザインしようという社会モデルを「ミュージアム未来学」ということにする。…1)

塚原氏の「ミュージアム未来学」という新しい社会モデルに照らして、志摩歴史資料館周辺での「知と学び」について考えてみる。図書館、可也公民館、健康福祉センターふれあい、歴史資料館、中央公園、プロムナード、川邊の里とこれだけの施設や広場が一箇所にあるところはめずらしいのではないだろうか。これだけ整備されたスペースを私たちは十分に使ってきたのだろうか。このスペースこそが、「ミュージアム未来学」でいうところの人と未来を結ぶ創造装置であり、未来をデザインし、発明する中核施設である。つまり、「知と学び」の装置はあるのに、そこに「知と学び」がないという現実である。そこで、「知と学び」を取り戻すために考えたのが、「キッズ歴史探検隊」である。

◇歴史探検隊

なぜ、歴史探検隊なのかというと、再び、塚原氏の言葉を借りることとする。

…歴史には、人と自然のかかわりや人と人のかかわりに加え、人々が未来へ抱いた夢や感動が刻み込まれている。それは今生きている人々が未来への夢を抱くためのかけがえのない宝物になる。

それゆえ、あらゆる人に、未来からみた過去、未来からみた現在などつねに未来からのまなざしから思考する機会を意図的に作り出すことが可能になり、新たな感動を促し、一人ひとりの未来をつくるチカラを磨きあげることができる。…2)

つまり歴史を学ぶことは、そこにある夢や感動に出あい、自らが生きていくチカラを磨くことになるからである。これらの施設やそこに集う人や学ぶ人たちを巻き込み、子どもと大人が共に学びあう装置としての「キッズ歴史探検隊」なのである。子ども達を中核にして、志摩にある豊富な遺跡や伝統行事を地域の宝に変換させるブラックボックスが「キッズ歴史探検隊」なのである。その活動をとおし、子ども達は自らのチカラで未来を切り開く主体へと成長していくのである。学校の学習とは違い、より多くの人と出あい、より多くの地域のモノと出あい、その中に大切にしたいと思うモノ、つまりは宝を見つけることになるのである。「キッズ歴史探検隊」は、地域に根ざし、地域を愛

し、地域の宝を見つけるプロジェクトのキーとなるものである。

◇アミュージアム

二つ目のコンセプトは、「アミュージアム」という造語である。横田正弘氏は「博物館はマーケット」という著書の中で「アミューズメント」+「ミュージアム」＝「アミュージアム」として紹介している。ミュージアムがサステイナブルであるためには「アミュージアム」でなければならない。「アミュージアム」とはお客さんが楽しんでいる状態を表している。「面白いミュージアム」は、あくまでも、ミュージアムの本質を離れない面白さで、楽しませるということである。より多くの人々が訪れてみたくなるようなしかけが必要だということである。

「ミュージアム未来学」を大きな木の幹として捉えると、その枝や葉になる。つまりは木を飾るコンセプトが「アミュージアム」である。どんなに木の幹が大きくても、つまり「ミュージアム未来学」がすばらしい社会モデルでも、それぞれの施設や催しに人々が興味をもって、「面白い」と思わなければ、人は来ない。人が来たくなくなるようなしかけも重要である。このしかけを二つ目の夢アイデアとしたい。

3. 具体的な取り組み

1) 「キッズ歴史探検隊」の活動

「キッズ歴史探検隊」は子ども達が歴史を学び、体験できるプログラムである。志摩町時代には、生涯学習として企画された町民大学「交流志摩専科」があったが、現在合併後は市民大学として開催されている。その講座の一つに「歴史散歩しま専科」という講座がある。歴史の研究者と学ぶ人たちが「キッズ歴史探検隊」という子ども達と出会い、新たな学びの場をつくるのである。市民大学の発想は、もともと学びを町づくりや地域づくりに生かすということにある。

まずは、子ども達が講座生から歴史資料館や新町遺跡についてボランティアガイドをしてもらいながら、自分たちの住んでいる地域の歴史的な特色を知ることから始まる。次に、常設展示で学んだことを実際にやってみる。砂鉄から鉄を、そして海水から塩を、貝殻からブレスレットをつくる。また、古代体験として、火おこしや矢じりづくり（黒曜石）、縄文クッキー（しいやどんぐりを使って）づくりなどの活動を計画する。その体験活動の後、夏休みや冬休みなどの長期休暇中を利用して、以下の一連の活動を行う。この場合、九州大学の学生との連携も可能になる。

- ①地域に残る遺跡をめぐるマップづくりや、風土記づくりの計画を立てる、
- ②地域ごとに、現地に行き写真を撮ったり、話を聞いたりする
- ③プレゼンテーションの準備をする。
- ④プレゼンテーションをもとに、地域の子ども風土記をつくる。

歴史という地域の遺跡、出来事、行事を自分たちで調べてまとめ、最終的には行政区ごとに子ども風土記をつくる。

- ⑤案内板をつくる。（子ども達が考えるキーワードを入れて）

案内板の設置ができれば、いろいろな人がそこを訪れるように、

- ⑦オリエンテーションマップをつくり、スタンプやキーワードを探しながら、探検で

きるようにする。

一連の活動は、大人たちの学びの成果を子ども達に、子ども達の学びの成果を風土記や案内板に、その成果を一般の人々（観光で訪れる人も含め）へと広げる活動となる。

2) 建物の構造や概観を生かして

志摩歴史資料館の概観は船の形をしている。石造りで、採光のためのガラス窓があるため、エントランスホールはとても明るい。また、二階には、ひなたぼっこができる展望スペースもある。とてもユニークなつくりとなっている。その特色を生かして「ミュージアム」になる、面白い、楽しいと思われるような仕掛けを考えてみる。

①本いっぱい

資料館のホールには、図書館から借り出して閲覧できるように、歴史関係の本、子ども達にも読める本を置く。現在夏休みともなると遊びに来る子ども達がいるようであるが、かくれんぼをしたり、暴れたり、注意したくなるような状態であるという。子ども達にも楽しめるいくつかの活動が用意されていれば暴れることはなくなるのではないかと考える。

②音楽いっぱい

ホールは天井が高く、音が反響してコンサートにいい条件だそうだ。かつて、コンサートが開かれていた経緯がある²⁾。秋にはいろいろなジャンルでコンサートが開催できるようにする。

③花いっぱい

建物のまわりに季節の花が咲くと前の公園とも調和が取れる。春には菜の花、夏にはひまわり、秋にはコスモス、冬には水仙が咲くように整備する。また、向い側の公園には、散策コースがあるので、中央にはハマボウのような木を植えて、楽しく散策できるようにしたい。

④光いっぱい

資料館二階の西側には、ひなたぼっこスペースがある。明るさと温かさをPRして、秋冬のひなたぼっこを勧めたい。また、石で構成された概観には、光のオブジェ、イルミネーションを飾り、期間限定光の祭典を開催する。

⑤おひな様いっぱい（特別展）

現在も実施している「いとしまのひな祭り」³⁾はいろいろなおひな様が飾られる。特別展示室には、「〇〇いっぱい」という企画を行なう。

例えば、「おいしいものいっぱい」では、季節限定、期間限定のレストラン、カフェの開催など。

⑥夢いっぱい（やってみたい企画公募）

12月には子ども達の絵が飾られている。一般から企画を公募して、みんなが見たいものを飾る。（生け花、布、ファッション、など）また、外ではその概観を生かして夕日鑑賞会、野外パーティー、野外コンサート、結婚式、ビアガーデンなどのイベントの企画を公募する。

このように、いろいろなアイデアが生まれ、発展させることが可能である。

4. 終わりに

「ミュージアム未来学」と「アミュージアム」という二つの言葉をよりどころに、夢アイデアを考えてみた。それはもとより、今あるモノを宝だ、大切だということを地域住民に再認識してほしいがためである。なくなってからでは、遅い。今あるうちに、その大切さを再認識して、地域を**宝化**するための装置として機能させなければならない。そのためには、地域住民の力が必要である。すべては、未来の子どものために、大人と子どもの協働による地域の再発見である。地域に残る多種多様な宝がなくなってしまうために！夢アイデアの実現を！

脚注

<1>フィールドワーク写真 10月10日可也公民館歴史講座3回目



九州大学伊都キャンパス
石ヶ原古墳跡展望展示室より望む



元岡地区史跡案内版

<2> 志摩町における生涯学習のモデル事業から生まれた、交流志摩専科「志摩町民大学」の開講により実現したコンサート。平成11年秋の音楽祭、ホールコンサート。ピアノ工房を主宰されている方が歴史資料館のホールの音響がいいということに気づかれたことから実現した。平成13年、志摩町歴史資料館コンサート2001と題され、10月27日アンサンブル 11月17日ジャズ 12月8日ポピュラーと3回連続で行われている。2003年平成15年の報告書によると桜井の「工房ピアノギャラリー」大城氏の全面的な協力で安価な出演料で開催できたので、入場料は1,000円だった。プロの生演奏を低価格で聞けるということでチケットがすぐに売り切れる状況だった。次年度からは、状況がかわったので1500円に値上げされる。このホールコンサートは、平成21年市町村合併になる年まで開催された。

<3> 特別企画展として毎年早春に開催されている「糸島のひなまつり」展。今年で16回目を迎える人気企画だ。展示されているお雛様は、地域の方からお借りして展示。この企画も交流志摩専科「志摩町民大学」から始まっている。志摩町には工房が多く、「しままちのやきもの展」がふれあいで開催された流れの中でおひなさま展が企画されたようで、集まりすぎて飾る場所が歴史資料館になった。

引用文献

塚原正彦 「みんなのミュージアム 博物館・図書館未来学」(2016)
日本地域社会研究所

1) p 45 L4~L14 (時空の壁を超えて~)

2) p 49 L2~L8 (歴史には、)

横田正弘 「博物館はマーケット」(2009) 春日出版 p 179- p 180

志摩町民大学運営委員会 (2003)

平成 15 年度生涯学習事業実施報告書&平成 15 年までのあゆみ

志摩町民大学運家委員会&教育委員会

(2004)「交流志摩専科 志摩町大学」10 周年記念誌

参考文献

牧野篤 「シニア世代の学びと社会 大学がしかける地の循環」(2009) 勁草書房

瀬沼克彰 (21 世紀の生涯学習と余暇)「住民が進める生涯学習の方策」(2009) 学文社

瀬沼克彰「磨く！育む！創る！輝く！元気な市民大学 生涯学習と人・地域の活性化」

(2007) 日本地域社会研究所 コミュニティ・ブックス

井形慶子 「人生が輝くロンドン博物館めぐり」(2015) KADOKAWA

齊藤海仁 「なんて面白すぎる博物館」(2012) 講談社ビージー